日本ＡＡＬＡ連帯委員会ニュース

欧米は大量虐殺より反ユダヤ主義が問題

マンスリー・レビュー　オンライオン

ttps://mronline.org/2024/05/12/the-west-believes-antisemitism-is-a-more-egregious-problem-than-genocide/

イスラエルによるガザへの大量虐殺攻撃の結果、欧米の権威が失墜した。これはすでに一世代前から進行していた変化を加速させたにすぎない。

もちろんそれは偶然の一致だった。

オーストラリア・デーが終わろうとする頃、国際司法裁判所（ICJ）の 17 人の裁判官は、2023 年 12 月 29 日に南アフリカ政府から提出されたイスラエルによるジェノサイド事件に対する暫定措置命令をだす準備をしていた。

南アフリカは、グローバル・サウスの主要メンバーとして、また BRICS 経済ブロックの創設メンバーとして、この行動に出た。30 カ国がこの訴訟を支持したが、欧州からはアイルランドとスロベニアの 2 カ国だけだった。

いくつかの点では 16 対 1、その他の点では 15 対 2 という多数で、裁判所は南アフリカを支持し、パレスチナ人が「大量虐殺行為から」保護されるべきだとの根拠がある事件であることを認めた。停戦要求には応じなかったものの、イスラエルが「ジェノサイド条約に基づく義務に従って」満たすべき一連の条件を示した。条約が禁止する行為、特に殺害、身体的もしくは精神的に深刻な被害を与えること、または住民の全体的もしくは部分的な身体的破壊をもたらすような生活条件を意図的に加えることを防ぐために、『可能な限りのあらゆる措置をとる』ことが命じられた。

これらの暫定措置はイスラエルを法的に拘束するものであったが、イスラエル

はこれを無視し、大量殺戮、深刻な苦痛、物理的破壊は間断なく続けた。世界の国々はそれを恐怖の目で見ていた。西側諸国は、ネタニヤフ首相のように ICJ が「ハマスの法的機関」になっているとまでは主張しなかったが、否定的な態度をとった。アメリカの指導者たちは、大虐殺の証拠は何も見いだせず、南アフリカの提訴には根拠がないと宣言した。オーストラリアと同様、他の国々は、その重大性にもかかわらず、事件を無視した。私たちの場合、政府の公式な反応も、司法長官からの法的な説明もなく、これまで政府の誰一人としてジェノサイドという言葉を使った者はいない。これは明らかに、統制のもとでの回避である。

しかし、反ユダヤ主義がジェノサイド（大量虐殺）よりも深刻な問題であるという詭弁を弄し、世界中の憤りからイスラエルを守る言葉や外交を意図的に作り上げているのは、西側諸国の政府だけではない。西側メディアも同様に責任がある。外部からの調査も内部からのリークも、同じことを物語っている。イスラエルとシオニストの感性を擁護するために、ニュースが意図的に作り変えられている。ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、ガーディアン、BBC や ABC など、リベラルな知識人の大きな砦も同様だ。そして今、学生運動の高まりとともに、アメリカの最も権威ある大学は、学生運動を鎮圧するために機動隊を送り込み、その結果生じた暴力と混乱を犠牲者のせいにするのと等しい行動をとっている。

その代償は何か。イスラエルの応援団たちは、西側の大国とその追随者たちに道徳的権威の壊滅的な喪失が訪れていることに気が付いてうるだろうか。オーストラリアの指導者たちが世界中で宣言している「国際的なルールに基づく秩序」についてのうんざりするような講義を、誰が再び受け入れるだろうか。人権や西側の民主主義国家が模範とされるべきという副次的な説教も同じだ。おそらく最も傷ついたのは、アメリカやヨーロッパの主要国が、説いたことを実践しない偽善者であることが明らかになったことだろう。

イスラエルを見れば、1948 年の建国以来、国際法を無視し、無数の国連決議に事実上背いてきたことがわかる。その国を我が国のウォン外相は『不動の友人』と呼び、『不動の支援』を提供している。一週間ほど前、中国外務省の林建報道官は、ガザ市のアル・シファ病院で集団墓地が発見されたことに言及した。私た

ちが知る限り、この出来事はわが国の主要メディアでは報道されず、オーストラリア政府の誰からもコメントされなかった。林報道官は、ガザの広大な地域が瓦礫の中に取り残され、100 万人以上の市民が『死の瀬戸際で絶望の中でもがき苦しんでいる』と述べた。21 世紀にこのようなことが起きているという事実は、『人類の道徳的良心に対する暴挙であり、国際正義の最も基本的な側面を踏みにじるものだ』といった。悪魔も経典を引用できるのは事実だが、この発言は、オーストラリアのコメンテーターから発せられる狡猾で用心深い言葉よりも、はるかに世界世論に近い。

イスラエルによるガザへのジェノサイド攻撃の結果、西側の権威が失われたことは、すでに何世代にもわたって進行していた変化を加速させたにすぎない。脱植民地化の一貫として最近では、ヨーロッパ帝国主義の歴史の再解釈が広まり、西洋の台頭の理由が分析され、外界の資源の略奪、奴隷制の役割、先住民の土地の窃盗に注目が集まっている。賠償を求める声はますます大きくなっている。旧帝国に対する尊敬の念は失われつつある。シンガポールの知識人リーダーであるキショア・マフブバニ氏は昨年 12 月、ロンドンの『フィナンシャル・タイムズ』紙にこう書いている： 西洋が何世紀にもわたって世界の他の国々の想像力と尊敬を集めてきたことは周知の事実だ。しかし、何十億もの人々の心の中で静かに、目に見えない形で起こっていることある。それは西側が今、その尊敬を失いつつあるということだ。

アメリカから広まったキャンパスの反乱は、西側諸国の政府、メディア、大学の指導者たちには不可能だった仕事をしている。彼らは、イスラエルの破滅的なガザ包囲を支持することによって堕落させてしまった人権やその他の原則を守る立場をとっている。彼らは、救済が可能であることを世界の他の国々に示したのだ。（了）

【翻訳チェック　田中靖宏】